

学位審査結果報告書

学位申請者氏名 磯部 彩香

学位論文題目 Attitudes towards people with dementia: a cross-sectional study comparing dental hygiene students with registered dental hygienists (歯科衛生学生と現役歯科衛生士における認知症患者に対する態度に関する横断研究)

審査委員 (主査) 中道 敦子



(副査) 引地 尚子



(副査) 船原 まどか



学位審査結果の要旨

認知症患者に適切な医療や介護を提供するためには、歯科衛生士が認知症に対する偏見のない態度を身に付け、十分な知識を得ることが必要である。本研究の目的は、歯科衛生学生の認知症に対する態度と知識を評価し、その態度と知識に関連する要因を特定することである。

方法は、先行研究に基づいた認知症の人に対する態度尺度、認知症の人に対する知識尺度に、エイジズム尺度 (Fraboni Ageism スケール日本語版) を加えたアンケート調査を実施した。エイジズム尺度は、「誹謗」「回避」「差別」の3つの下位尺度19項目で構成されており、得点が高いほどエイジズムが低い、すなわち偏見が小さいと評価する。また、潜在的因子を検討するために認知症への関与に係る情報(「認知症患者との関わりの有無」、「認知症に関する関心」、「家族構成」、「高齢者との同居経験」、「認知症患者との同居」、「認知症高齢者への歯科診療の希望」等)を収集した。調査の対象は、歯科衛生士養成校4校の3年次生学生191名と現役歯科衛生士64名であった。調査は2016年5月から7月の期間に郵送法で実施した。統計解析は、各尺度の妥当性、整合性、信頼性を確認したのち、重回帰分析により態度に関連する要因を検討した。

結果は、認知症へに対する態度・知識の両方で現役歯科衛生士の得点が高く、学生と比較し、より積極的で知識が豊富であった。反してエイジズムの得点は学生に比較して低く、認知症への偏見が大きかった。認知症への関与に係る情報は、すべての項目において現役歯科衛生士が歯科衛生学生に比べ「はい」の回答が多かった($p < 0.01$)。3つの尺度間の関連は、全体では認知症に対する態度はエイジズムと相関があった($r = 0.443, p < 0.01$)。学生では態度とエイジズム($r = 0.551, p < 0.01$)に、現役歯科衛生士では知識とエイジズム($r = 0.499, p < 0.01$)に相関があった。重回帰分析により、認知症に対する態度は、エイジズム、認知症への関心、認知症患者の治療に携わりたいという欲求、歯科衛生士としての経験年数の順で相関があった。

歯科衛生学生の教育において、認知症への関心を高める実践的学修機会を増やし、深い知識教育を行うことで肯定的な態度を身に付けさせる事が重要であると考えた。

公開審査において申請者の磯部氏に対し、主査・副査より、本研究への主体的関与や社会への学術的波及効果及び普遍性等に関する質問を行ったところ、生涯学習意欲を示しつつ概ね適切な回答が得られたことから、博士学位論文としての要件を満たすものと判断した。